

マタイによる福音書1章「ダビデの子、神の御子」

1A キリストの系図 1-17

1B ダビデの子 1

2B 王族の系図 2-16

1C アブラハムからダビデ 2-6

2C ダビデからバビロン捕囚 6-11

3C バビロン捕囚からヨセフ 12-16

3B 十四代による区分 17

2A キリストの誕生 18-25

1B 聖霊による懐胎 18-23

1C イエスという御名 18-21

2C インマヌエル 22-23

2B 命令に従ったヨセフ 24-25

本文

マタイによる福音書1章です。私たちは、これから福音書を読んでいきますが、前回のマラキ書でお話したように、決してこれまでの旧約聖書からかけ離れた話ではありません。むしろ、そのままの続きになっています。これまで読んできた創世記からの神の救いのご計画が、キリストにあって明らかにされていき、それが私たちの人生にも明らかにされていくという、すばらしい旅をこれから辿って行きます。

福音書は、四つありますがそれぞれの特徴があります。一人の人物、イエス・キリストをそれぞれ四人の弟子たちの視点によって、描かれています。マタイは、十二弟子の一人で取税人でした。そしてマタイによる記録は、取税人らしく几帳面な書き方をしており、旧約聖書にある律法や預言が、イエス・キリストにあって成就したのだということ強調しています。そして、預言者であり、かつ教師としてのイエス様の姿が出てきます。たくさんの律法に基づく教えを行なわれます。

マタイがこの福音書を書き記したのは、いつかははっきりしていません。イエス様が復活されてからすぐ、例えば 37 年に書かれたと言う人もいます。多くが 50 年頃ではないのかとも言います。はっきりしているのは、イエス様が甦られ、昇天されてからそれほど経っていない時、例えば私たちがオウム真理教による地下鉄サリン事件であるとか、阪神大震災であるとか、二十年ぐらい前であれば、それだけはっきりと、記憶に残っているような時であろうと考えられます。

1A キリストの系図 1-17

1B ダビデの子 1

1:1 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。

「系図」から、新約聖書は始まります。多くの人が聖書を読むのを勧められて、系図から始まっているので面食らう人が多いですね。けれども、これこそが旧約時代において、神がご自分の計画を明らかにする時に鍵になる言葉であります。創世記を思い出してください、アダムが罪を犯して、主なる神が蛇に対して宣言された呪いは、「おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。(創世 3:15)」であります。「子孫」によって、神は人類を救うことをお考えになったのです。そして創世記は、カインをエバが生んだ時に、この子が女の子孫、メシヤ、キリストだと思いました。生まれて来る子が、神からの方、メシヤであると思いましたが、弟を殺人することによって裏切られました。そして5章に系図があり、ノアにまで至ります。そして、11章にはアブラハムに至るまでの系図があり、アブラハム、イサク、ヤコブと続きます。ルツ記において、ダビデに至る系図が最後に書かれています。

バビロン捕囚になり、そこから帰還した人々によって、歴代誌を書き記しました。そこは、長い系図から書き始めていて、その当時にまで至る系図があります。そして実は、ヘブル語の聖書、つまり元々の聖書は、歴代誌が最後の書物となっています。私たちは、預言書のマラキ書を最後の書として持っていますが、ユダヤ人の聖書は歴代誌なのです。したがって、マタイが系図から書き記すということは、実に意図的であり、歴代誌の系図を意識して、その続きとして書いている可能性は大きいのです。

そして新改訳は「アブラハムの子孫、ダビデの子孫」と訳していますが、ギリシヤ語は「ダビデの子、アブラハムの子」となっています。もちろん、アブラハムの子孫からダビデが生まれ、そしてダビデの子孫としてヨセフ、そしてイエス様が出てきたのですが、強調しているのはダビデなのです。なぜか？それは、神が地上にご自分の国を立てられるのですが、ダビデに対してその世継ぎの子が御国を受け継ぎ、王として統べ治めると約束されたからです。マタイが強調していくのは、この御国の福音です。つまり、神が王として支配されることによって、そこに私たちを救う良き知らせがあるということです。

主は、ダビデを選ばれました。イスラエルには初めサウルが王として建てられましたが、それは人が選んだ王であり、王自身、神の命令に背きました。それで神はほかの人を選び、それがダビデでした。ダビデは「愛された者」という意味であり、また「神の心にかなう者」と呼ばれました。彼が王としてイスラエルで認められた時に初めに行なったことは、神の箱を自分の町エルサレムに運ぶことです。彼は神への礼拝と讚美を愛しました。彼は王でしたが、彼自身は神を王としあがめていたのです。そこで神は彼に対して約束されました。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの

先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとおしえまでも堅く立てる。(2サムエル 7:12-13)」ダビデの王座からメシヤが現われるという約束です。そこで「ダビデの子」というのが、メシヤを表す呼び名の一つになりました。そして詩篇には、ダビデの子としてのメシヤの姿が濃厚に描かれており、預言書でもその通りです。

したがって今、マタイが強調しているのは、「イエスこそが、約束のダビデの子である」ということです。そしてもちろん、アブラハムの子孫であるということも大事です。アブラハムという名前の意味は、「あなたの名はアブラハムとなる。わたしが、あなたを多くの国民の父とするからである。わたしは、あなたの子孫をおびたたくふやし、あなたを幾つかの国民とする。あなたから、王たちが出て来よう。(創世 17:5-6)」と主は言われます。したがって、アブラハムへの約束にも、王が出てくるという内容が含まれています。けれども、アブラハムへの約束には、イスラエルの民だけでなく、多くの国民が祝福されるという広がりがあります。つまり、神の国には、ユダヤ人が救いを受けているだけではなく、異邦人もまた救いを受けるという広がりがあるのです。紀元前一世紀に、ユダヤ人だけの間で信じられていたイエスの御名が、異邦人にも宣べ伝えられていき、ユダヤ人と異邦人が一つとされる教会が生まれて行ったというのは、必然的なものなのです。

2B 王族の系図 2-16

1C アブラハムからダビデ 2-6

1:2 アブラハムにイサクが生まれ、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブにユダとその兄弟たちが生まれ、1:3 ユダに、タマルによってパレスとザラが生まれ、パレスにエスロンが生まれ、エスロンにアラムが生まれ、1:4 アラムにアミナダブが生まれ、アミナダブにナアソンが生まれ、ナアソンにサルモンが生まれ、1:5 サルモンに、ラハブによってボアズが生まれ、ボアズに、ルツによってオベデが生まれ、オベデにエッサイが生まれ、1:6a エッサイにダビデ王が生まれた。

アブラハムからダビデ王に至るまでの系図です。ダビデが、王として呼び名が与えられているのは、かなり王としてのダビデを意識しています。そしてこの系図において、これまでのユダヤ人の系図とは、かなり異なっているのは、女性の名前が出て来ることです。6 節後半に、「ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれ」とありますが、これで合計四名の女性が登場しています。なぜ、女性が出て来るのか？そうです、思い出してください、創世記におけるメシヤ、キリストの預言は、「女の子孫から」ということでした。女という弱い器から、生まれて来る子孫であります。

そして、四人の女は全て異邦人です。タマル、ラハブはカナン人です。パテ・シェバ自身はユダヤ人か異邦人か分かりませんが、夫ウリヤがヘテ人であり、異邦人の妻です。いずれにしても、カナンの地に住んでいた現地の人です。それから、ルツはもちろんモアブ人であり、ユダヤ人ではありません。マタイは論証しているのでしょう、イスラエルのメシヤ、救い主ご自身に、異邦人の血が

入っているのだということです。つまり、主はユダヤ人を越えて、異邦人にもその御手を広げているということをここで示しています。

そして、四人の女は全ていわくつきの人たちです。タマルは遊女の格好をして舅であるユダから子を宿した女です。ラハブはカナン人の遊女です。エリコに偵察にきたイスラエル人を救うことによって、彼女とその家の者たちはエリコの破壊を免れることができました。そしてルツは、エリメレクの家族の息子の一人と結婚したモアブ人です。その父祖モアブは、ロトとその娘との間の近親相姦で生まれた子であります。いかがでしょうか、だれが王の系図にこのような赤裸々な話を載せるでしょうか？ここが、聖書がまさに、聖なる神のことばであることを示しています。神は、すべてのものを照らす光です。どんなことも、暗闇も光に照らし、そして人々を真理のところに來るようにさせます。皆さんの生活に、やましいこと、後ろめたいこと、負い目、その過去があったとしても、どんなことがあっても、神はキリストにあってご自分の子にすることができるということです。神の国の市民になるように、招いておられると言うことです。

2C ダビデからバビロン捕囚 6-11

1:6b ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれ、1:7 ソロモンにレハベアムが生まれ、レハベアムにアビヤが生まれ、アビヤにアサが生まれ、1:8 アサにヨサパテが生まれ、ヨサパテにヨラムが生まれ、ヨラムにウジヤが生まれ、1:9 ウジヤにヨタムが生まれ、ヨタムにアハズが生まれ、アハズにヒゼキヤが生まれ、1:10 ヒゼキヤにマナセが生まれ、マナセにアモンが生まれ、アモンにヨシヤが生まれ、1:11 ヨシヤに、バビロン移住のころエコニヤとその兄弟たちが生まれた。

ダビデからバビロン捕囚までの系図です。ここは、列王記、また歴代誌における歴代のユダの王と同じです。しかし、ここ「エコニヤ」というのはエホヤキンであります。彼について預言者エレミヤが、彼からはユダを治める者はないという預言を行なったのです。「このエコニヤという人は、さげすまれて砕かれる像なのか。それとも、だれにも喜ばれない器なのか。なぜ、彼と、その子孫は投げ捨てられて、見も知らぬ国に投げやられるのか。地よ、地よ、地よ。主のことばを聞け。主はこう仰せられる。「この人を『子を残さず、一生栄えない男。』と記録せよ。彼の子孫のうちひとりも、ダビデの王座に着いて、栄え、再びユダを治める者はいないからだ。(22:28-30)」彼らは度重なる神への反逆によって、主はついにエホヤキンからの王系は出さないと宣言されたのです。

3C バビロン捕囚からヨセフ 12-16

ところが、エコニヤからヨセフまでの系図が次にあり、そしてイエス・キリストが生まれています。これはなぜか？その前に次を読んでみたいと思います。

1:12 バビロン移住の後、エコニヤにサラテルが生まれ、サラテルにゾロバベルが生まれ、1:13 ゾロバベルにアビウデが生まれ、アビウデにエリヤキムが生まれ、エリヤキムにアヅルが生まれ、

1:14 アゾルにサドクが生まれ、サドクにアキムが生まれ、アキムにエリウデが生まれ、1:15 エリウデにエレアザルが生まれ、エレアザルにマタンが生まれ、マタンにヤコブが生まれ、1:16 ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。

ヨセフはダビデの子孫であり、確かにダビデの家系であると法的に言うことができます。しかしマタイは系図において、しっかりと、はっきりと、ヨセフがイエス様の父であると言っておらず、「キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。」と言っています。創世記 3 章 15 節の「女の子孫」であり、相続というのは男によって行われていきますが、メシヤはその人の系図を壊すかのように「女の子孫」と位置付けているのです。

そこで、イエス様のもう一つの系図があり、ルカの福音書にあります。ルカ 3 章 23 節からヨセフからさかのぼり、アダムにまで至る系図が記されていますが、マタイにある人物と他の人々が出て来ます。つまりルカは、「ヨセフ」とありますが実はマリヤの系統であり、マリヤの父からさかのぼっているのです。そして、それは「ナタン」というダビデの息子によって、ここにあるマタイの書き記した系図に合流します。マタイ伝では、ダビデの息子ソロモンに王権が受け継がれましたが、その他にナタンという息子がいました。ですから、イエス様はマリヤを通してダビデの子としての約束を受け継ぐことができます。

けれども、一般のユダヤ人の認識では、ソロモンがダビデ王族の継承者であり、エコヌヤまでそれが続き、その末裔が正式なダビデ王族を受け継ぎます。つまりイエス様は、「血統」としてはマリヤによってダビデの子であられ、「王位継承」としてはヨセフによってダビデの子であるということが出来ます。王家の継承としても、またエレミヤの預言に照らし合わせた血統としても、イエス様はダビデの子であるということが出来るのです。

福音書を読み進めますと、ヨセフの存在がかなり薄いのです。マリヤの子であるとして、イエス様は知られていましたが、ヨセフの子としてはあまり知られていなかったようです。おそらく早くして死んでしまったのではないかと想像します。そこで、要らぬ噂も立っていました。これから見て行きますが、処女懐妊したのですが、それゆえに不品行の間に生まれたのではないかとまで噂されていたようです(ヨハネ 8:41)。ですから、ここでキリストとして、ダビデからの正統な王位を継承していることを示しているのでしょう。

3B 十四代による区分 17

1:17 それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。

三つの区分でそれぞれが十四代となっていますが、実はところどころで旧約聖書の系図には

出てくる人物が何人か省略されています。これは当時の系図においては、しばしばあることです。「生まれた」とか、「何々の子である」と言っても必ずしも直接の出産ではないことがあります。これは「十四」というものを意図的に書き記したかったのだらうと思われれます。ギリシヤ語もそうですが、ヘブル語には、そのアルファベット一つ一つに数字があてがわれています。ダビデはTITという子音で、T(dalet)が4、I(vav)が6なので、4足す6足す4で14になります。やはりここでもマタイは、ダビデ王を強調し、イエスがダビデに約束された世継ぎの子であることを強調しています。

2A キリストの誕生 18-25

しかし、キリストが来られることについて、ダビデの子であることと共に、最も大きな出来事は聖霊によって、女が身ごもったとすること。神から生まれた方、神の御子であるということが次の話です。パウロが、「御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。(ローマ 1:3-4)」と言いました。

1B 聖霊による懐胎 18-23

1C イエスという御名 18-21

1:18 イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。

処女であったのに、マリヤは懐妊しました。ここで、「その母マリヤはヨセフの妻と決まっていた」とあります。婚約なのですが、当時のユダヤ人の婚約は今の婚約とは大きく違います。二段階があって、第一段階は二組の夫婦がそれぞれの子どもを結婚させるように決めます。第二段階は、実際の結婚の一年前に行われて、二人は結婚をするための準備をします。マリヤが妊娠した時、二人は第二段階の婚約の状態にいたのです。このときは法的に縛られています。結婚しているのと同じように、この関係を破棄するということは離婚することに等しいものでした。

しかし、ヨセフとマリヤは性的な関係を持っていたわけではありません。どのように生まれたのかは「聖霊によって」とあります。マタイは、これだけを簡潔に記していますが、マリヤが御使いガブリエルから懐妊を告知されたことについて、詳しくルカが書き記しています。こちらは、ヨセフ側に起こった出来事を記しています。そこには、マリヤが主の言葉を信じ、そしてバプテスマのヨハネの母エリサベツのところに行って、そこでマリヤは賛歌をうたいますが、そういったことはヨセフには知らされていませんでした。

1:19 夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。

ここからヨセフの苦悩が始まります。まさか、自分の許嫁が不品行を犯したとは、という衝撃です。今、話しましたように、婚約の段階ですが、すでに結婚と同じ縛りがあります。「さらし者にはしたくなかった」と言っていますが、律法によれば石打ちの刑なのです。そうです、ヨセフは、主を恐れて、律法を守り行なっているユダヤ人でありました。イエス様は律法の下にお生まれになることにあります。そしてその石打ちの刑ですが、このように申命記に書いてあります。「ある人と婚約中の処女の女がおり、他の男が町で彼女を見かけて、これといっしょに寝た場合は、あなたがたは、そのふたりをその町の門のところに連れ出し、石で彼らを打たなければならない。彼らは死ななければならない。これはその女が町の中におりながら叫ばなかったからであり、その男は隣人の妻をはずかしめたからである。あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。(22:23-24)」

しかし、ヨセフは「内密に去らせようと決めた」と言っています。つまり、石打ちのような公開処刑ではなく、離婚状を出そうと思っていたのです。これも律法に書かれていることで、申命記 24 章 1 節にあります。ここで大事なのが、ヨセフが「正しい人」であるという説明です。正しいということには、憐れみが多分に含まれます。主の律法を敬いますが、それは神の憐れみがあってこそ、正しく運用できると言えます。私たちが、主の言葉を、聖書を杓子定規に振りかざすのではなく、主を恐れ、かつ憐れみや執り成しの心をもって生きる時に、それは神の前で正しいことなのです。

1:20 彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。

「思い巡らしていた」という言葉には、逡巡していたという思いが込められています。彼は苦悩しました。悶え苦しみました。いったい、何が起きているのか？とっていました。主を恐れる者たちには、その恵みが大きいだけ、このような苦悩が与えられることがあります。私たちの理解を超えたところにある恵みですので、時にそれが理解できなくて苦しくなる時があります。

それで御使いが夢の中で表れています。聖書には、夢によって見せてそれで導きを神が与えることが出てきます。その中で、「ダビデの子ヨセフ。」と呼んでいます。彼が確かに、ダビデ家系の者であるから、彼にキリストが与えられる資格があるのです。そして、「恐れないうあなたの妻マリヤを迎えなさい。」そうです、ヨセフは非常に恐れていました。聖書の中に、「恐れるな」という励ましの言葉がたくさん出てきます。それは、それだけ恐れることが多いからです。ヨセフにとって、預言者ホセアのことを思い出していたかもしれません。彼は、姦淫の女と婚姻するように神に命じられました。そしてはっきりと、御使いは、「その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」と言いました。他の男ではなく、聖なる神の御霊ご自身によるものです。

そういえば、ダビデに対する約束に、ダビデの子が単なる人間の子ではなく、神ご自身の御子であることが書かれていました。「2サムエル 7:14 わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって

子となる。」そして、キリストが生まれることを預言したイザヤも、人の子であり、そして神の御子であることをはっきりと告げました。「イザヤ 9:6-7 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの(男の)子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」王なる方、キリストが赤ん坊として生まれるのだけれども、この方はひとりの子、御子であられ、父なる神ご自身と等しくなられるのです。

そして、聖霊によるイエス様の降誕が、私たちがキリストにあって、新しく生まれることにつながっていきます。イエス様は神の御子として聖霊によってお生まれになりました、私たちが神の養子縁組になる時は、同じように御霊によって生まれるのです。「ローマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。」

1:21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

バプテスマのヨハネの時に、父ゼカリヤはヨハネという名を付けるように指示して、周囲の者たちがどうして？そんな名前はゼカリヤの家にはいないのに？と不思議がられました。それはもちろん、主ご自身によって与えられていたからです。同じように、おそらくイエスという名は、ヨセフの家にはなかったことでしょう。御使いが敢えてその名を付けなさいと命じます。そして午前礼拝で話しましたように、イエスという名は「主が救う」ということです。救いというのは、いろいろな状況からの救いを意味しますが、根本は罪からの救いです。エレミヤは、新しい契約の約束を預言した時に、こう話しました。「31:34 わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」罪の赦しによる、罪からの救いです。

2C インマヌエル 22-23

そして主は、罪からの救いをご自身が人となることによって、成し遂げてくださいます。

1:22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。1:23 「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)

マタイは、注意深く、このイエスにある出来事が預言者の言ったとおりのことであることを書き記しています。ですから、イザヤ書 7 章 14 節にある預言です。メシヤは処女から生まれることが預言されていました。アハズが王であった時に、北イスラエルとシリヤから攻められるのではないか

と思っていた時、神はイザヤによって、そんなことは起こらない。しるしを与える、と言われました。それが、処女が男の子を産むという徴だったのです。

そしてこの方の名は「インマヌエル」ですが、「神は私たちとともにおられる」です。つまりこの方ご自身が神なのだ、ということです。イエス・キリストは、神のひとり子であり、神から使わされた救い主だけであるだけでなく、神ご自身です。救いは罪からの救いですが、それは神から離れていた私たちが、神と共にいることができるという救いがあります。私たちはこれから、人として来られたキリストの働きを見ていくことになります。それが可能になったのは、神が人となられたことによります。

2B 命令に従ったヨセフ 24-25

1:24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、1:25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。

ここが、私たちが模範として学ぶべきところでしょう。「主の使いに命じられたとおりにした」ということです。本当は、婚約の期間は一年間ですが、ヨセフは迷うことなく、一年経っていないのに、そのまま婚姻をしたことを伺わせます。自分には理解できないことであっても、それでも主を恐れ敬って、従うのです。私たちにそのような信仰が与えられますように。

そして、彼が主を恐れ敬うことは、「子どもが生まれるまで彼女を知ることがな」かったところにも表れています。これはまさに、アブラハムの時に似ているでしょう。彼から出る子が約束の子ということなのに、彼はサラは妹だとして、パロやアビメレクのハーレムの中にサラが妻として入れられるままにさせていましたが、主ご自身が痛みつけられ、それをやめさせました。なぜなら、もし他の男と関係を持つならば、生まれて来る子が、アブラハムの種によるものか、そうでないかが分からなくなります。ですから、主はやめさせたのです。同じように、ここでヨセフは、自分の子ではなく、確実に処女降誕であり、聖霊によって神がみごもるようにくださったことを示すために、イエス様が生まれるまで、夫婦の関係は持たなかったのです。ちなみに、マルコ 6 章 3 節には、その他四人の兄弟がいた事が記されています。ですから、マリヤはずっと処女であったのではなく、イエス様の時だけ処女だったということです。

マリヤもそうですが、ヨセフも、主に与えられた使命を果たすには、とてつもない信仰と耐え忍びと、そして主に言われたことを行なおうとする従順があります。私たちにも、神はご自分の計画を持っておられます。その働きが尊ければそれだけ、私たちはヨセフのように逡巡することがあるでしょう。しかし、それこそが神の働かれている証拠です。その恵みに追いついていけないことがあります。けれども確実に主はご自分の計画を果たしておられるのです。